

へびと鍛治屋 新潟県

むかし、糸魚川に、貧しい刀鍛冶がありました。鍛治屋は、働き者でしたが、もうだいぶ年をとつていました。妻は亡くなつていて、たいそう美しいひとり娘がありました。鍛治屋は、娘をたいへんかわいがつっていました。

鍛治屋は、つねづね、こういつていました。

「娘の夫になる人は、宵から明けがた一番鶏の鳴くまでに、刀を千本作る腕のある者でなくてはならん」

これまで、たくさんの若者が、美しい娘を手に入れようと、やつてきました。けれども、だれひとりとして、宵から明けがたの一番鶏の鳴くまでに、千本の刀を作れる者はいませんでした。

ある秋の暮れ、ひとりの侍さむらいが、鍛治屋の家にやつてきました。侍は、白い顔に目鼻立ちのくつきりした美しい若者でした。鍛治屋が侍を家に入れると、侍は、すぐに仕事場に入つて行つていいました。

「では、一番鶏の鳴くまでに、千本の刀を作つて見せましよう。けれども、どうぞ、あしたの朝まで、ここをのぞかないでください」

鍛治屋は承知しょうちしました。

鍛治屋が奥の部屋で寝ていると、仕事場の方から、トツテンカン、トツテンカンと、刀を打つ音が聞こえて来ました。夜が更けるにつれて、その音はさえわたつて、鍛治屋はいつこうに眠れませんでした。

「どうして、働いているところをのぞかないでくれといったのだろう」

鍛治屋は気になつて仕方しかたがなくなりました。そこで、むつくり起きあがつて、しのび足で仕事場に行きました。板戸のすきまからのぞいて見ると、大きなへびと小さなへびが刀を打つていました。

鍛治屋は、おどろいて部屋にもどり、どうすればよいだろうと考えました。かわいい娘をへびと結婚させるわけにはいきません。

考えに考えた末、鍛治屋は裏のにわとり小屋に行つて、にわとりがとまつている竹ざおの中に煮にたつたお湯を注ぎました。にわとりは、足が熱くなつたのでびっくりして目を覚ました。そして、朝が来たのだと思つて、コケコツコーと鳴きました。

そのとき、へびは、刀をちょうど九百九十九本作ったところでした。にわとりの鳴く声を聞くと、へびは、あと一本を残して、どこへともなく消えてしまったということです。

おしまい

村上郁再話

資料『伝説の越後と佐渡』中野城水／文章院出版部